

狐きつねの提燈ちようちん

むかし ある村むらに、太郎兵衛たろべえという 紺屋こうやが すんでいました。

ある なつひの日、太郎兵衛たろべえは、山一つやまひと むこうの 町まちまで そめこ

を 仕入しいれれにいきました。かえりがけに 村むらの ちかくまできます

と、もう 日ひが くれて ほたるが ピカピカ ひかっています。



太郎兵衛たろべえが、ふと むこうを 見ますと、みちの まん中なかに 一いっび
きの きつねが いて、ふさふさした しっぽで じべたを ぴた
ぴた たたいています。

「おや。」と おもって 立ちたどまりますと、きつねは ピヨイと
一ひっつ でんぐりがえしを しました。と おもうと 手てに しぶう
ちわと ほたるかごとを もった 十四じゅうし、五ごの 女おんなの子こに 化ばけま
した。なんだか 見たみような かおなので、よく 見みると 村しやうの庄しょう
屋やの うちの すえむすめの おぎんおんなという 女おんなの子こに 化ばけた

しぶうちわ…かき
しぶをぬったじよ
うぶなうちわ

しやうや…村のや
くにん

のです。きつねは おぎんと そつくりの こえで、

「ほうたるこい、山ぶきこい。」と うたいながら ほたるを おい

はじめました。太郎兵衛は、

「ふふん、きつねめ、わしを 化かそうとしてるな。ようし、一つ

こつちから うらを かいて、あべこべに だましてやれ。」と き

つねの ほうへ あるいていました。と きつねは こちらを む

いて、

「紺屋のおじさん、こんばんは。」と こえを かけました。そし

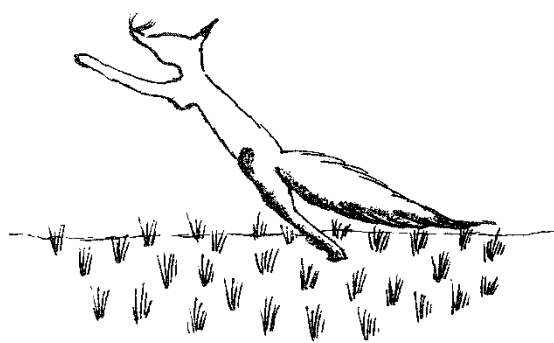
て、

「おじさん、わたし もう うちへ かえるから、そこまで いっ
しよに いきましようよ。」と 言いいます。

太郎兵衛たろべえは うなずいて、いきなり きつねの 手てを ぐつと
つかむなり、とつとと あるき出だしました。きつねは、

「あたたた、おじさん、そんなに ひどく 手てを にぎつたら い
たいじゃないの。」と なきそうな こえで いいました。太郎兵衛たろべえ
は へんじも せずに ぐんぐん 足あしを 早はやめました。きつねは

また、



「おじさん、いたってば。ごしようだから、こっちの手
と かえて 下さいよ。」と 行って、かたほうの 手を出
しました。

太郎兵衛は 手を かえるくらいなら 大丈夫だろうと

おもって にぎりかえますと、その ひょうしに きつねは
すうつと かききえてしまいました。見ると、いま にぎりかえた
と おもった きつねの手は、なわの きれはしに かわっていま

す。

「ちよつ、とうとう にげて しまいやがった。」と なわを じ
べたに なげすて、また いえへ むかつて いそぎました。

と、みちの むこうから ちようちんの 火が チラチラ 見え
出して、だんだん こちらへ やつてきました。ちかづいた ところ
ろを 見ると、それは、自分の おかみさんでした。

「おかえんなさい。おまえさんの かえりが おそいので むかえ
に きたのよ。その そめこは わたしが もつから、かわりに ち

ようちんを もって下くださいな。」太郎兵衛は くびに ぶら下さげた
そめこの ふろしきづつみを といて、おかみさんに わたし、ち
ようちんを うけとりました。みちみち、太郎兵衛は たろべえ いまの き
つねの ことを、おかみさんに はなして きかせました。おかみ
さんは、

「へえ、しようやさんとこの おぎんさんに ばけたの。ずうずう
しいのね。」と いいました。

やがて いえへ ついて、くぐりどを あけて 入はいりますと、ど

うでしょう、おかみさんが　どまで　ゴロゴロ　石^{いし}うすを　まわし
ているでは　ありませんか。びっくりして、ふりかえって　みます
と、いままで　じぶんと　いっしょにきた、そめこを　もった　お
かみさんが　いません。どまの　おかみさんは　へんな顔^{かお}で、

「あら、おまえさん、どうして　こんな　まるたんぼうを　にぎつ
ているの？」と　いいます。そういわれて　じぶんの　手^てを　見^みま
すと、いままで　赤^{あか}い　ひの　ともった　ちようちんが、きたなら
しい　まるたんぼうに　かわっているでは　ありませんか。

「しまった。とうとう きつねのやつに だまされた。」と 太郎兵衛は めんぼくなさそうに あたまを かきました。そのとき うらの 田んぼの ほうから、

「コンコンコン。」と きつねの なきごえがして、だんだん とおくなつて いきました。

あくるあさになつて みますと、さくやの そめこは うらの 田んぼに ぶちまけてありました。

